

タイ人日本語学習者による長音・短音の知覚

*京都大学大学院人間・環境学研究科 †京都大学学術情報メディアセンター

尾崎 真佐子* 坪田 康† 平岡 斉士† 壇辻 正剛*†

1. はじめに

タイ人日本語学習者が長音・短音の知覚を困難とする要因については、音節位置、アクセント型から検討されている(皆川1997)。皆川(1997)は2音節語を対象に検討したが、本研究では更に3音節語を加えた調査を実施した。その結果、先行研究では見られなかった誤り傾向が確認されたので報告する。

2. 調査方法

タイ人日本語初級学習者28名を対象に、聴取テストを実施した。テスト単語は、長音を1つ含む語(45語)と、含まない語(48語)の合計93語である。東京方言話者による単語音声が無作為な順序で提示し、被験者に単語中に長音があるか、及びそれがどの音節であるかを判断させた。

3. 調査結果

誤答には、短音を長音と聞き誤る「長音挿入」(例;とみ→と一み)と長音を短音と聞き誤る「長音脱落」(例;ぼこ→ぼこ)が見られた。「長音挿入」の生起率は2音節語で12.4%、3音節語で22.3%であり、「長音脱落」の生起率は2音節語で14.5%、3音節語で17.2%であった。この「長音挿入」の生起率が「長音脱落」より高い結果は、先行研究と一致する。新たな誤り傾向として、長音を含む語で長音を短音と聞き誤った上に、他の短音を長音と聞き誤る「長音の位置誤り」(例;きのせ→きの一せ)が見られた。位置誤り率は、2音節語で3.1%であったが、3音節語では約4倍の11.4%であった。この結果から、音節数の増加が知覚の混乱を増幅させた可能性が示唆された。

以下に、種類別に、誤答の生起率が高い音声環境について報告する。

【長音挿入(例;とみ→と一み)】 音節位置別には、2音節語では語頭で有意に多く、また、3音節語では語中、語頭、語末の順に有意に多かった。アクセント型別に見ると、2音節語では差がなかったが、3音節語ではH型で有意に多かった。

【長音脱落(例;ぼこ→ぼこ)】 音節位置別には、音節数を問わず、語末で有意に多かった。長音が語末の場合をアクセント型別に見ると、2音節語ではHLL型(下線は長音部)で長音脱落が有意に多かったが、3音節語ではアクセント型による差はなかった。

【長音の位置誤り(例;きのせ→きの一せ)】 2音節語、3音節語ともに、長音が語末の場合に位置誤りが有意に多かった。アクセント型別に見ると、2音節語ではHLL型とLHL型で位置誤りが有意に多い傾向があった。一方、3音節語では、長音が語末の場合で、アクセント型が生起率に与える影響に差はなかった。

この研究の成果の一部は文部科学省研究費補助金基盤研究(B) 課題番号16320052によるものである。

参考文献

皆川泰代（1997）「長音・短音の識別におけるアクセント型と音節位置の要因—韓国・タイ・中国・英・西語母語話者の場合—」『平成9年度日本語教育学会春季大会予稿集』， 123-128.